市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会
会長　大橋秀一郎

No.11　平成5年7月1日発行　編集：総務幹事　矢倉　睦

山岳会の行事 顛末集

－２月－

白馬栂池スキー合宿

久保田淳三

藤村、岡野両君らの企画により、準備・実施されましたＯＢスキー合宿は天候、雪量にも恵まれ全員怪我もなく、和気あいあいのうちに無事終了しました。ただ、参加者が当初予定よりも少なくなった点は少々寂しい気がしました。

期　日	２月17日（水）～22日（火）			
宿泊先	リゾートイン栂池館			
参加者	小　笹	（20日夜の部のみ参加）	佐々木夫人	（17日～22日）
	岡　野	（18日～21日）	藤　村	（17日～21日）
	岡　本	（20日～21日）	藤　木	（17日～21日）
	同夫人	（20日～21日）	久保田	（19日～21日）

期間中（17日～22日）都合の良い日に参加ＯＫでしたが、それぞれ社会人現役であり、体力的にも数日間スキー滑走を続けるのは無理な年齢でもあり通期参加者は一人（佐々木夫人）にとどまりました。

栂池ゲレンデは、白馬乗鞍岳の麓に広がる緩斜面のどちらかと云えば初心者向きのゲレンデでヤングには人気が高く、どちらを向いてもヤングギャルであふれかえっていました。

積雪量は２m60cmあり今年は多い方でしょう。

宿泊先はおなじみの栂池館で別館は洋館建ての立派なものですが我々は旧館の

和室８畳間、ヤグラ炬燵を真ん中に置いたこれまでの民宿タイプ、スキーにはこれが相応しいでしょう。

食事は朝、昼、夜とも新館のレストランでとりましたが、これの楽しみは何といっても若いギャルの皆さんに囲まれて食事ができたことでしょう。隣の席の女の子に「あなたたち、女子大生でしょう？」、女の子「そのとおり！去年短大に入った１年生よ」。「明日スキーを教えてくださいね」とは云われなかったけれど19～20才位の短大生が圧倒的に多いようです。（後学のため報告）
我々白髪頭のグループは少々場違いの雰囲気とは言え、プロスキーヤー然として20才代？のつもりで振舞っておりました。ほんとにスキーは年を忘れさせる妙薬ですよ。楽しい！楽しい！　投肝心のスキーの腕前ですが、山岳部のＯＢとしては全員合格ライン（自称１級～２級）でしょう。

17日～18日頃は雨も降り、天候もいまひとつとのことでしたが、19日～21日はまずまずの雪のちらつく好天に恵まれました。栂池館のスグ上が鐘の鳴る丘ゲレンデです。情報誌によれば「このゲレンデにはくれぐれも２年前のウエアーでは近付かないこと、ギャル達にバカにされること請け合い」というほどのギャルの盛り場です。我々上級者はそれを横目に見てずっと上の上の最奥部のゲレンデ、栂の森、馬の背、ハンの木ゲレンデ等で華麗？な滑走をアピールしておりました。朝８時朝食、９時出発、午前中滑走、昼食時に戻り１時間位の休憩ののち午後再出発、リフトの止まる５時ごろまでフルにリフトを使いフルに滑りまくりました。

夜はレストランでギャルを横目にビールで乾杯、スキー談義で時間をつぶしました。部屋では改めて２次会開催。

１日フルに滑れば翌日は体が動かないのではと心配しましたが小生の場合、３日連続滑りましたがどうということはありませんでした。

期間中、山なみが見えたのは20日の昼過ぎ約30分位でした。鹿島槍、唐松、五竜、白馬鑓、白馬岳と白銀の峰々が神々しく素晴らしい眺めでした。

スキーは隊列を組んで行動できるものでなく、あくまで個人プレーですので、はぐれる場合も多々ありましたができるだけ団体行動をとるよう努め、腕、否足を競い合い、この合宿で参加者全員かなり上達して終了することができましたことをご報告します。

スキーは年をとってもできるスポーツであり、毎年このような合宿は実施した方が良いと思います。スキーは楽しいものです。体力維持と親睦を図るため、各会員とも都合をつけて沢山の方の参加を希望します。

最後に準備に奔走していただきました幹事の皆さんに感謝致しますともに来年

の準備も併せてお願いします。

― 3 月 ―

東六甲縦走・初参加の記

大島一恭

卒業して数年でほとんど山登りをしなくなりましたが，十数年まえより渓流（山女魚）釣りに凝りだし、京都北山の芦生原生林に入りびたっておりました。近年、信州・飛騨に遠征することも多くなり、雪の槍、穂高、剣岳、御岳等を身近に仰ぎ見、釣りだけではもの足らず、ハイキング程度の山行を始めております。そんな折、山岳会の総会に20年振りに顔を出した所、懐かしい諸先輩が元気に活躍されておられ、また企画運営幹事の方々の努力により年間行事が活発に展開されている事を知り、何とか参加したかったのですが、中々機会に恵まれず、やっと３月の「東六甲縦走」に初参加することができました。

阪急宝塚駅に集合、最終目標の有馬温泉のビールに向けて、取付点を間違う事なく出発。幸い天候も良く春のポカポカ陽気の為気持ち良い汗も沢山出（有馬温泉であれだけビールを飲んだのですが、家に帰ってみると体重が２kg減ってました）、西村ビッグマウスのラッパも絶好調、ワイワイガヤガヤと中年登山隊のうるさい事。山歩きに来たのか、しゃべりに来たのかよくわからない人達です。何だかだと言いながら２ピッチで稜線の岩倉山、３ピッチで船坂峠にて昼食。さすがにこの時ばかりは少し静かになりました。リュックも軽くなり、腹ごしらえも充分、一気に六甲山 931mまで。春がすみの為展望は今ひとつですがやはりテッペンは気持ちが良い。

有馬温泉まで一足で下り、公衆浴場（当然温泉）に入り、２階で小宴会。山歩きの後の温泉とビールと雑談は最高です。何年か振りで先輩諸氏と山歩きを伴にし、非常に楽しい一日でした。

尚、来年は小宴会ではなく、有馬保養所にてスキヤキパーディの大宴会を企画するとの事ですので、皆様多数の御参加をお願い致します。

（昭和45年卒　大島　記）

五月の立山

上堂竹寿

山岳会から「立山の自然の旅」の案内をいただき、久し振りに雪の山を歩きたく連休初日霧雨の入山、室堂からガスの中、地図をたよりに雷鳥荘を目指す。立山と云へば、槇有恒著「山行」幸田文著「崩れ」を思い出す。
先着の皆様に挨拶、昭和33年冬山の鹿島槍以来の山本勝先輩に御会いする。暫く休憩して、皆で雷鳥沢のテントサイト上まで散歩、今年は雪が多く小屋が埋まっているし、まだテントの数も少ない。当山岳会のテントを見つけたが佐々木氏不在。雷鳥荘は温泉付の立派な山小屋です。２日目は雪で沈澱。食べたり飲んだり、しゃべったり、リルンの話、四方山話に花が咲く。それにもあきると、温泉が待っている。こんな楽しい沈澱もあったのか。

小屋で聞くと明日は晴れるだろうと云う。早々に就寝。３日目、少し曇っているが立山連峰の稜線が見渡せる。やっと晴れそうだ。早出、早帰りを旨に、早朝から佐々木氏が作ってくれた暖かくておいしいおじやで朝食をすませ、出発。室堂経由で一ノ越を目指す。道々雷鳥が沢山姿を見せる。まだ白い冬羽根であの訛声のせいで、鳴声と姿がなかなか一致しない。天気は回復に向かっているが、寒さ厳しい。一ノ越は吹き抜ける強風で早々に小屋に入り、腹ごしらへの弁当を食べ、不要な荷物を残し、アイゼン、防寒具を付けて出発。取付は急なクラストした斜面、慎重に登る。高度を増すにつれ天気も次第に回復し、雲がきれて青空もあらわれる。頂上近く日も差し始めて風もゆるんで、五月の山らしくなる頃到着。周囲360度雄大な展望に皆満足。鹿島槍が一際光っている。三十数年前の春山、向こうから眺めた立山連峰、あのときは、こちらから雲がわき、天気のくずれに早々に下ったことを思い出す。今日はそんな心配のない上天気、祠にお参りして上り以上に慎重に下る。風もおさまり一ノ越は数時間前とは大違い、スキーヤーや登山者で賑わっている　。汗が出るくらいの日差しに、足の向くままブラブラと、途中スキーヤーの品定めなどに一服しながら、実に楽しい雄山行でした。

午後からは小屋の前の斜面でのスキー組の見学。皆さんなかなかの腕前、来年はスキーを練習しよう。

予定を変更して一日延ばして、４日目。大日岳から剱を眺めてと期待したがあいにくの雪、残る方々に別れて下山。

先着の皆様の中に一人見かけない顔がと思い聞いてみると、福岡からの単独行の青年が飛び入り参加との事、なかなかの好青年で、会員と思うくらいよく馴染んでいました。

今回の計画から現地まで連絡その他一貫して、朝、昼、晩、何くれとなく御世話していただいた幹事の皆様に感謝。

第１０２回ボート祭参戦記

清原鉄也

５月30日（日）：　山辻Dr.　島川判事、岡本、苑樹、佐々木、
当日の参加者　　大島、西村、福山、八木、清原　　以上10名

今年もご機嫌で漕がせてもらいました。山岳会としての出場、復活３年目。昨年、市大山岳会ニュースに小生の嬉しい気持ちを披露させていただき、それが皆様のお目にとまったということか、当日は何かと花を持たせていただき、有り難いことでした。

寒冷前線が通過するということで、隣接府県全てに強風波浪注意報や雷警報が出ており、小生は十中八九、中止を確信して会場に参りましたが、他の皆さんはすでに到着、テントを張ったり、ブルーシートを拡げて、歓談されていました。山辻Dr.がサントリーから調達されたＴシャツ（背中にリルンＩ号、Ⅱ号の看板入り）に全員着替え、招集のかかるまでの間Ｉ号のクルーはブルーシート上に本番通りに整列、スタートの切り方を練習しました。スタート当初の４～５本を、ストロークを標準の50～60％に縮め、そのかわりピッチを高めて、艇の滑り出しを滑らかにしようという寸法です。山辻Dr.以外は初体験、畳の上の水練よろしく、陸で実際にやってみたわけです。

そのあと、今年は慣れたもので、応援団が店開きするのを待ちかねて、こちらからエールを依頼。先頭を切って、景気をつけてもらいました。一同、勇気凛々、やる気満々、勝つことしか考えていないから、楽しいことこの上なし。

艇にも一番先に乗り込みました。スタートまで若干時間のゆとりがあり、先程のスタートの切り方の実演やクルーの呼吸合わせも一応は終わることができました。（通常はそのヒマもないのです。）そのようなことで、ヒョッとしたらという期待もあったのですが、1位艇にはものの見事に水をあけられてしまいました。小生の目線の反対側で起こったことですから、何が原因かわけがわかりません。しかし、乱れなく漕ぐ、ということでは終始一貫、結構な漕ぎでした。

リルンⅡ号にも、一言ふれるべきなのでしょうが・・・・。ここまで書いて、昨年も自分が気持ちよかったことだけ書いて、他の皆様のことに及ぶいとまが無かったのを思い出しました。何故なのか？急場しのぎのとりまとめですが、クルーの息を一つにできることによって得られる至福があって、一昨年と今年はそれを得られた。

自分勝手と叱られるかも知れませんが、さかりのついた犬みたいに、それ以外のものは眼中にない、というのがどうやら小生の実体のようです。まことに申し訳ありません。そのような私ですが、来年もお誘いいただけるでしょうか。

最後に、夜もまだあけやらぬドシャ降りの中を家を出られ、日曜の朝8時にＪＲ桜宮駅に馳せ参いられた皆様の熱意に最大級の敬意を表します。また、コックスとして応援下さいました八木君の僚友、浪速高校の女性陣にもお礼申し上げます。来年もご支援下さい。

リルンⅠ号　　西村、佐々木、山辻、清原（整長）
リルンⅡ号　　島川、大島、福山、苑樹（整長）

－ 6 月 －

新緑の中を銅板碑へ

三島義彦

6月3日

阪急三番街バスセンター8時発松本行バスで松本へ。所要時間5時間30分。着後タクシーで坂巻温泉へ。ビスタリ組と名付けられて中島氏、藤本氏夫人、長谷さんと私どもと5名が一緒する。

6月4日

河童橋のたもと西糸屋で昼食をとった後、雨の中を明神の山のひだやに向ふ。傘をさしていると脚がいふことをきかないしで約1時間半もかゝって了ふ。致仕方ないことと思ひ乍も情けないし残念至極。2時半頃に服部さん、岡本氏。4時すぎに川勝氏が上高地から徳沢は荷物をかついで通りすぎるばかりでゆっくり歩いたことはないからと、徳沢迄行って、すっかり人になれているおしどりに楽しませて貰って到着。冷え冷えとして寒くなって来たので、岡本氏が交渉してストーブを部屋に入れて貰って大助かり。

6月5日

大阪発夜行寝台で来られた萩野氏、藤本氏、西田氏は6時すぎにひだやに入られ、全員揃い一緒に朝食をとる。8時前に出て、昨秋藤本氏により綺麗に掃除されている銅板碑に参り、幾多の先輩更には泉先輩と昨年2月急逝された福田源四郎氏の霊に黙禱をさゝげる。1986年に現在地に再建してから毎年有志の方と共に参って冥福を祈っていたが、平成3年10月思いもかけぬ脳梗塞発病で右肘右膝に麻痺が残り、右脚がしっかりと上がらず歩行に困難を覚えるようになっ了っては、目標希望をもう一度銅板碑に参ることにおいてリハビリにつとめていても、とても歩けないだらうと参ることはあきらめざるを得ないと思っていた。2月山岳会総会の時、もう一度行き度いと云ふ希望を藤本氏に話していたが、この度藤本氏御夫妻の深い御配慮で、又参加された方々の励ましとご援助によってお参り出来た事は全く有難く嬉しいことで、又素晴らしく美しいなつかしい新緑の徳沢上高地を眺めたのは何年かぶりであった。この眺めは昭和9年に見たのがはじめてで、当時牛が放牧されていた記憶があるが、その後何回見たことか。この地へ来てこの景色を眺めるのもこれが最後かと少々感傷的になる。曇っている為前穂、北尾根そして思ひ出の多い四峰を見られなかったのが心残りとなる。　徳沢でおしどりが近くまで寄って来て投げられたせんべいのかけらを素早くついばむのに感心して見とれる。明神で徳本峠の方に少し入った所に石楠花の群生の花を見つける。

6月6日

上高地へ。途中かもしかを素早く見つけられた方がいる。今迄機会のなかったウエストン祭を見学し、重廣恒夫氏の講演を聞いて松本へ。バスセンター6時発で帰阪する。

徳沢園の新しい建物や日本山岳会の新しい建物更には上高地村営小屋、清水屋、温泉ホテル等が豪華な建物になっているのに驚く。徳沢、明神、上高地の公衆トイレが綺麗になっているのも驚き。上高地のさま変わりは時代の流れか。

御一緒していただいた方々のおかげで、迷惑をかけ乍も何とか歩けて、銅板碑

にお参りすることの出来たことを深く感謝します。

NEWS NEWS NEWS

大阪市立大学スポーツアソシエーション第４回定例総会　　奥田　寛

６月19日（土）市大・田中記念館において、ＯＣＵＳＡ（市大スポーツアソシエーション）の第４回定例総会が開催されました。山岳会からは、ＯＣＵＳＡ副会長である大橋会長、奥田、小松が出席しました。

平成４年度事業報告、収支決算報告に続いて平成５年度の計画、収支予算案が審議されました。優秀クラブ・選手の表彰ではサッカー部が最優秀クラブに、硬式野球部とラグビー部が優秀クラブに選ばれるなど、各賞の表彰が行われました。各部とも活気が溢れており、顕著な成績をあげるところが出ている模様です。山岳部も活気のある登山活動で注目を集めることを期待します。

来賓挨拶で学生部長より学生施設の整備構想（総合スポーツ会館、文化会館、学生厚生会館）の紹介がありました。そして総合スポーツ会館の建設に向け、現在、野球場スタンドの大改造（スタンド下の部室含む）が計画されている、とのことでした。

★ TOPICS ★ TOPICS ★

（仮称）北尾根会の集い　　川勝　弘一

四月十日の日曜日は、心配した桜も、寒波の爾来で、咲き出すのが遅れ、京都では、ちょうど見頃、天気も上々と、非常に恵まれた一日でした。かつて、穂高の峰々に血を湧かし、岩壁に、積雪期のナイフ・リッヂにアタックした面々が、

故泉隆次郎氏の追悼会の席上、一度集まろうじゃないかとの話がもち上がった。それではと、昭和27年～34年頃に卒業したメンバーで、とりあえず京阪神在住の人々に声をかけた所、13名に参加していただきました。中には、既に亡くなった人もありましたが、積雪機前穂高北尾根のチーフ・リーダーであり、ランタン・リルンで亡くなられた故大嶋健司氏の代わりには、姉上に出席していただきました。午前十時、ＪＲ京都駅に集合、地下鉄で新装成った府立植物園で、爛漫と咲きほこる桜花を賞で、三々五々散策に時を忘れて、旧交を温めることが出来ました。中には顔を会はすのも何年ぶりといふ人もあった様です。同園北門前の中華料理店「白龍」に正午頃入り、パーティーに移り、ここでも想い出話に花の咲いたことです。萩野氏が前穂高北尾根四峰正面岩壁に打ち込まれていた古いピトンを持参されたのは、一同驚きました。山が、大きな自然の一部分であるからには、年令によって、体力によって、それぞれの楽しみ様で接することが出来るのも、山登りのよさでせう。穂高や剱の岩壁からヒマラヤやチベットまで登りまくる時代もよし、ピークハンティングを目的としなくとも、動植物の観察や写真撮影を楽しむことが出来るのも、山の懐の深さでせう。想い出話ばかりでなく、近々のまた将来の山行計画まで話題の尽きることはなかったのですが、再会を約して午後三時頃散会しました。

＜出席者＞　池永薫爾、萩野昌宏、服部恵子、大嶋佐和子、橋本信行・洋子夫妻
南文一、東野美智代、藤本勇、清原鉄也、浅部禎一、岡本恒夫、川勝弘一
（以上13名敬称略）

山 行 記 録

～ 北海道羊蹄山スキー滑降 ～

上田忠士

北海道に転勤してきて８年目に入った。夏は山歩き、ゴルフをやっているが、冬はスキーぐらいしかすることがない。こちらに来て始めたスキーも３年目からゲレンデを飛び出して、山スキーが主になった。北海道の山は概してなだらかであり、積雪期の登山はスキーを多用する。山スキーはシールをつけて歩くから斜

度20°ぐらいまでは直登可能。慣れればワカンよりラクであり早い。その上登ってシールをはずし、滑降準備が出来たら登りの4分の1ぐらいの時間で、スキーを楽しみながら下山できる。結構楽しいものである。
今回は北海道の富士山と言われる「蝦夷富士」羊蹄山に挑戦した。

1993年3月7日

前夜羊蹄山、真狩側登山口に北海道での山仲間2人と幕営。ビールとジンギスカン料理で翌日の好天を祈る。6時起床。スキーにシールをつけて7：30登山開始。夏でも5時間かかり、登り始めたら1mも下りがない羊蹄山。天気は快晴。陽やけが気になる。

積雪2－3mあり、ところどころにある赤布を見つけて適当に登る。夏道はあるが、それは雪の下で分からない。約2時間登り、右手の尾根らしいものを100mぐらいトラバース気味に越し、広いボチの沢に出る。ここが滑降コースなので方向を確認。真南である。ここから1時間強、斜度25°ぐらいの雪面をジグザグに登る。低木は雪に埋まっており、ところどころにダケカンバが出ている程度の大雪原である。

7合目あたりで、スキーをザックにつけ登山靴で登る。アイゼンがあればベターだが、今日の雪の状態ならなくてもよい。頂上が近づくにつれ、斜面も急になり、堅雪となる。ガスも出て来て、視界50mぐらいの中を真狩ピークに立ったのは13：05。大した休みもなく、5時間半の登りであった。火口壁がガスの中に時折見える。風も出て来て気温も下がって来た。約20分間頂上におり、スキーを靴につけ、滑降開始。標高1,893m、登山口は約300mだから高度差1,600m、長さ4,500mの滑降となる。

背中のザックはツエルトなどで6－7kg。大したことはない。上部はアイスバーン。岩も出ており転倒は許されない。気持ちよく滑ることにならぬ。最大斜度は35°を越しているだろう。難所を過ぎるとシュプールのない大雪面を目標に向かって自由にコースをとって滑る。深雪あり、堅雪あり、午後日の当たるところはくされ雪となり、樹林の中も滑り、途中昼食、大休止をとってテントサイトに到着したのは15：30。

下山後はニセコの露天風呂でビールで乾杯、札幌に向かう。車から見る羊蹄山はガスも晴れ、真っ白で何事もなかったような姿であった。

北ア　硫黄尾根

メンバー　：　尾形達也（ＯＢ）、藤間　剛（どたぐつＯＢ）、高尾　裕（現役）
日　　程　：　1992年12月25日～1993年１月１日

１日目　タクシーにて七倉に入る。計画書を提出し、お茶と野沢菜をごちそうになりながら朝食を済ます。聞けば我々が今冬一番乗りとのこと、静かなそして充実した山行が期待できそうだ。湯俣まで深い所でも膝下のラッセル。抜けるような青空で、やたら喉が渇く。晴嵐荘の河原で天幕。

２日目　いきなり寝坊する。こんなときは、何とも言えない自己嫌悪に陥るものだ。気を入れ替え出発。取付きの急な登り，　ブッシュ交じりの尾根をひたすらラッセルするが、身体が重い。硫黄岳前衛峰第一峰の手前で時間切れになってしまった。

３日目　最初の核心である硫黄前衛峰群は、赤茶けた脆い岩に注意しながら行く。懸垂下降２回。露岩部分以外の所は予想外にラッセルが厳しい。小次郎沢のコルにバカ下りして、硫黄岳の登りに入る。きつい傾斜のルンゼを空身でフィックスする。もうこの辺で日が暮れてきた、案外手間がかかるものだ。尾根の途中で、強引に雪を切り崩して、幕営。三日続いた晴天も、今日でおしまい。

４日目　朝から、ラッセル、ラッセル、ラッセル・・・・
やっと硫黄岳の頂上にたどり着いた。この登りにまる一日を費やしたようなものだ。硫黄台地は、二重丸印の快適さ。

５日目　第二の核心である赤岳前衛峰群に突入する。複雑なルートファインディッグが要求される。懸垂下降と、フィックスを繰り返して行くため、歩みが遅い。加えて天候も悪くなる一方だった。それでも、次から次へと出てくる岩峰は息つく暇も無く、時間を忘れさせる。あっというまに夜になってしまった。岩峰の上のわずかな平地に、テントを張る。ちょっと危なっかしいが、さいわい風が弱くて助かった。

６日目　前日と変わらず、懸垂下降と、フィックスの連続。この日が、最も天候

的につらかった。ビレーする手が凍え、コールを待つあいだ、まるで拷問を受けているようだった。中山沢のコルの手前で、後続パーティーに追いつかれる。こちらは、雪崩の可能性のあるところは、すべてロープを張っていたが、むこうは、安全よりもスピードを選んで、極力ロープを張っていない。コルは風が強く、テントがあっというまに埋まってしまう。一晩中交代で雪かきをする。後の2パーティーも張っていた。

7日目　烈風の中でテントをたたみ、出発する。今日中に尾根を抜けなければ、残り二日では心もとない。他のパーティーも動き出した。かなりの悪天候を覚悟していたのに、2、3時間もするうちに、晴れ間が見え出してきた。とうとう最後は、後のパーティーに抜かされてしまった。なにかだまされたような気持ちになる。西鎌から、槍平に下る。群がるテントの光が美しい。

8日目　のどかなお正月の朝、新穂高に下山。

最後はやや後味の悪い結果になったが、冬山の厳しさは、堪能できたと思う。ただ、もう少し体力があったなら、当初の計画であった、笠ヶ岳までの縦走もできただろうが・・・・

（文責　高尾）

★★★　編集後記　★★★

市大山岳会の事務は、これまで事務局ダイヤモンド電機㈱の松本由利子さんにお願いしておりましたが、松本さんが会社を離れるにあたり、後任は、同じくダイヤモンド電機㈱の古村有香さんにお願いすることになりました。皆様これまで同様、事務局をご利用下さい。松本さん、様々な雑務を本当にありがとうございました。また吉村さんこれからご面倒をかけますが、よろしくお願い致します。

遅ればせながら、新しい山岳会名簿をお届けします。万一訂正部分などありましたら、山岳会事務局までお知らせ下さい。逐次山岳会ニュースにて訂正致します。